

高大接続教育のための熊本大学肥後時修館の実施とこれまでの成果

平 英雄, シムズ ランダー ブライアント, 中村 謙太 (熊本大学)

熊本大学は 2019 年より高校 1, 2 年生を対象に将来のグローバルリーダーの育成を目指す「熊本大学肥後時修館」を開講し、これまで 140 人が修了している。高大接続教育と位置付けて実施している本取り組みについて、受講生の約 2 割が本学に入学し、入学区分ごとの入学者の割合に偏りはなかった。また、2023 年度までの 5 年間のアンケート結果より、受講生の日頃の学習に良い変化等が見られた。さらに、本取り組みの実施状況と今後の課題や展開についても報告する。

キーワード：高大連携、高大接続、先取り履修、グローバル教育

1 はじめに

1.1 熊本大学における高大連携・接続教育活動とグローバル化戦略

本研究は、熊本大学の高大連携・接続教育活動とグローバル化推進のために実施されている「肥後時修館」についての概要と実施状況の報告である。さらに、受講生の中で、本学を受験した受講生について、追跡調査した結果も報告する。

熊本大学は、教育による地域貢献、高校のキャリア教育への貢献、本学の教育・研究力の広報等を目的として高大連携・接続教育を積極的に推進している。本学は様々なイベントを実施しているが、最近では、熊本県における理数教育の発展と科学技術人材育成を目的とした熊本サイエンスコンソーシアムとの組織対組織での研究支援等も実施している（平ほか, 2023）。

一方、本学は、2014 年度に、文部科学省スーパーグローバル大学創成支援事業（以後 SGU と呼ぶ。）に採択され、地域のグローバル化を牽引するグローバル・キャンパスとして、様々な取組を展開してきた。また、本学は 2023 年度終了の SGU 後の 10 年を見据え、「熊本大学グローバル化戦略」を策定した（熊本大学, 2023）。

1.2 熊本大学のグローバルリーダーコース

グローバル大学を目指す本学にとって教育のグローバル化で中心的な取り組みが、文・法・理・工の 4 学部協働で進めているグローバルリーダーコース（以後 GLC と呼ぶ。）である（平ほか, 2019）。多様な価値観を受け入れられる豊かな教養と国際感覚、確かな専門性と柔軟性のある創造的な思考力を身に付け、国内外における地域の課題をグローバルな視点で考え、果敢に行動できる人＝グローバルリーダーを育てることが目的のコースである。

本コースのアドミッションポリシーにおける「求め

る学生像」では、主体的な学び、多様な価値観、文化の違いを理解できる豊かな教養と国際感覚・国際対話力等を有する人材を育てるために、以下の 5 つの観点を示しており、これらの観点に基づいて志願者の積極的な受け入れをしている。

1. 国際化に対応する幅広い教養を身につけたい人
2. 国際交流及び国際的なビジネスに携わることに意欲のある人
3. 国際化社会を牽引する強い胆力（精神力）を身につけたい人
4. 高度な専門性を国際社会で展開させたい人
5. 地域に根ざし、グローバルに活躍する意欲と資質をもつ人

本コースは、一般的なグローバル教育のために 1, 2, 5 の受け入れを目指し、リーダーとしては 3 を、さらに、それぞれの学部において高い専門教育修得する意味で 4 の受け入れを掲げている。実施する総合型選抜ではペーパーインタビュー審査の評価項目に「リーダーシップ」を含めており、リーダーの素質を持つ者が志願するよう明確な意思を示している（熊本大学, 2024）。

グローバル人材の輩出を掲げ、教育を実施している大学としては、例えば、秋田県の公立大学法人国際教養大学が有名であり、国際教養を基礎にグローバルリーダーを育てる教育が行われている。求める学生像においては、直接的な言葉としてリーダーを目指す学生の言及はないが、学修を通してグローバルリーダーの育成を目指している。（前中, 2014; 秋田県, 2024）

本学では、入学後も GLC の学生のための「GLC Foundation Seminar」と「Special Project」が用意され、これら 2 つのプログラムにおいて、GLC 生は、リーダーシップをはじめ、実際に考え・行動すること

で、クリティカル・シンキング、国際対話力、情報発信力、創造的知性等を養っている。

2 熊本大学肥後時修館

2.1 熊本大学肥後時修館の目的

SGU 事業における目標に、地域のグローバル化の促進があり、高校生に対しては、「熊大グローバル Youth キャンパス」事業により、大学入学前に国際的に学べる環境を体験できるようなイベントを実施している。例えば、高校生が、留学生と交流する機会や留学経験のある本学の学生から体験談、留学準備等について聞く機会を提供している。

高校生に対するグローバル事業実施の過程で、GLC に繋げる教育として、国際感覚豊かなグローバルリーダー人材養成を高校生にまで広げ、グローバルリーダーの育成を早期に実施し、大学の学びについてマインドセットを持たせる取り組みも必要との考えから「高校生のためのグローバルリーダー育成塾（熊本大学肥後時修館）」を 2019 年度から開講した。肥後時修館は旧細川藩に藩校としてあった「時習館」の名を借り、「習」の字を「修」に置き換えたもので、大学として地域の優秀な人材を育成する取り組みである。

当初はすべて英語での対面授業を目指し、体系的な内容も含む 3 テーマで始めたが、新型コロナウイルスの感染が拡大していた 2020 年度からオンライン環境で実施している。オンライン環境でも実施可能で、英語での実践的なコミュニケーション能力を身に付けるための授業や数理科学を題材にした論理的思考の強化をテーマにした授業を半年間かけて実施している。この取り組みは 2021（令和 3）年度の文部科学省「入試における意欲的な取り組みを集めた事例集」に選ばれた。

高校生に対するグローバルリーダーの育成事業は様々あるが、例えば大阪府で実施しているグローバルリーダーハイスクール（以後 GLHS と呼ぶ。）事業は、大阪府が「豊かな感性と幅広い教養を身に付けた、社会に貢献する志を持つ、知識基盤社会をリードする人材を育成する。」ことを目的に、府立高校 10 校を GLHS として指定し、探究活動を通して実施している。教育する主体は高校であり、評価に関して大学や政府、企業がかかわっている（大阪府、2023）。

前述の国際教養大学は、大学が学生に対して、また、大阪府の GLHS 事業は高校が高校生に対して実施する育成事業であるが、本学の「肥後時修館」は大学が高校生に対してグローバルリーダー教育を行うものであり、高大連携・接続を目指したものである。

2.2 熊本大学肥後時修館の実施内容

肥後時修館は、2019 年度から開講しているが、初年度は 3 テーマ、2020 年度以降は 2 テーマで実施している。2023 年度の肥後時修館は以下のような内容であった。

【テーマ 1】：

「Global Perspectives on “Society 5.0”
（“Society 5.0”における国際的視点）」

授業内容は、多分野にわたる社会、技術問題への考察を通じて、高校生に Society 5.0 の概念を紹介するものである。英語でのディスカッションとプレゼンテーション力の向上のみならず、Society 5.0 をめぐる諸問題へのグローバル的な意識、オンライン環境におけるチームワーク等を通してのリーダーシップ能力の育成を期待した内容である。また、本授業は大学教養教育相当のレベルであり、全ての授業および活動を、本学の多言語文化総合教育センター所属の教員が指導する。

【テーマ 2】：

「大学数学へのいざない」

授業内容は、高校数学（高校 2 年生までの内容）をベースとして、無理なく楽しめる大学数学を展開する。3 つの内容を 3 人の講師のもと、オムニバス形式で行い、論理性を学ぶものである。本テーマは本学数理科学総合教育センター所属の教員が指導する。

〈プログラム A〉 Brunn-Minkowski の不等式と等周不等式

〈プログラム B〉 モノの個数の数え方

〈プログラム C〉 数理解物理へのいざない

応募のための条件やスケジュール等は以下である。

受講対象者：九州内の高校生 1 年生、2 年生

募集人員：全体で 20 人程度、各テーマ別に 10 人程度でさらにグループで 2 つぐらいに分ける。しかし、募集状況、教員の意向によっては人員が増える可能性がある。

開校期間：10 月下旬から翌年 3 月末までを予定

スケジュール：9 月中旬 受講生募集

10 月中旬 合格通知送付

10 月下旬 開校式、授業開始

12 月下旬 対面での授業実施

3 月下旬 授業終了

対面授業：直接指導、在学生・留学生等との交流、プレゼンテーション等

特典：留学生行事への参加，附属中央図書館の入館カードの発行等，課題をまとめるための研修や e ラーニングによる授業の体験。修了証明書を発行し，この証明書は入試（調査書，活動歴等）に使えるよう配慮する。

2023 年度は，10 月下旬に開校式を行い，本学の e ラーニングシステム Moodle を利用して，10 月下旬から計 15 回の授業（90 分相当×15 回）を実施し，数回の対面授業を行った。募集時期は 9 月で，授業内容（テーマ）を募集時に示し，各テーマで 10 名程度を集める。応募者には，志望理由書の提出を義務付け，通常は，受講希望者が多数の場合，志望理由書を使用して選抜をするが，2023 年度は担当教員の意向もあり全員を受け入れた。

授業の実施場所は状況やテーマにより様々であるが，主に Moodle 上で行い，本学において数回の対面授業を実施した。来学が困難な受講生のため，対面授業のオンライン配信も検討したが，今回は対象となる受講生はいなかった。

2.3 実施状況

「肥後時修館」には 2019 年度から 2023 年度の間で 182 人の参加があり，その内 140 人が修了している。受講生の募集は，主に本学に志願者があった熊本県内の高校 55 校程度を選んで通知している。しかし，2019 年度のみ試行と位置付け，熊本市内の本学への志願が多い 7 校に通知した。また，2022 年度からは募集を九州内に拡大し，熊本県外の高校生には，本学の受験生向けポータルサイトにより受講生募集を周知した。次に，高校別の受講生数を次に示す。

表 1 高校別受講生数 その 1

熊本市内公立高校	受講生数	県内私立高校	受講生数
A ₁ 校	28	A ₂ 校	11
B ₁ 校	20	B ₂ 校	11
C ₁ 校	10	C ₂ 校	11
D ₁ 校	8	D ₂ 校	7
E ₁ 校	8	E ₂ 校	6
F ₁ 校	8	F ₂ 校	4
G ₁ 校	7	G ₂ 校	2
H ₁ 校	6	H ₂ 校	2
I ₁ 校	6	I ₂ 校	1
J ₁ 校	1		

表 1，表 2 にない県外の高校や高等専門学校からの受講生は，合わせて 8 人である。2022 年度から九州全域に募集を広げたが，これまでに熊本県外の受講生は 1 人しかいない。熊本市内の公立高校の参加者の合計が 94 人で，市内私立の高校と合わせると 137 人となり，受講生の約 75%が熊本市内にある高校の生徒である。熊本市以外の県内参加高校は，その地域で進学校として知られている高校からの受講生が多い。さらに，SSH 指定校や WWL 指定校，SGH 指定校よりは，英語科や国際コースを持つ高校からの受講生が多い傾向がある。

表 2 高校別受講生数 その 2

熊本市外公立高校	受講生数		
A ₃ 校	7	G ₃ 校	2
B ₃ 校	7	H ₃ 校	2
C ₃ 校	4	I ₃ 校	1
D ₃ 校	4	J ₃ 校	1
E ₃ 校	3	K ₃ 校	1
F ₃ 校	3	L ₃ 校	1

表 3 各年度のテーマ別受講生数と全体の修了率

	テーマ 1	テーマ 2	テーマ 3	修了率
2019 年	23(23)	5(5)	5(5)	100%
2020 年	20(18)	14(13)		92%
2021 年	46(27)	18(13)		78%
2022 年	10(8)	11(7)		71%
2023 年	27(19)	3(2)		70%
総計	126(95)	51(40)	5(5)	77%

注) 括弧内は修了者数

表 3 は，テーマ別受講生数と修了者数及び全体の修了率を表している。全体的には修了率が，年々低下する傾向にあり，2021 年度から 70%台となっている。この原因は不明で，理由の解明が今後の課題である。

表 4 各年度の受講生の学年占有率 (%)

	高校 1 年生	高校 2 年生	不明
2019 年	24.2	66.7	9.1
2020 年	23.5	67.7	8.8
2021 年	29.7	70.3	0
2022 年	23.8	76.2	0
2023 年	30.0	70.0	0
総計	26.9	69.8	3.3

表 4 は、各年度の受講生の学年占有率を表しており、毎年高校 2 年生が 70%前後を占めていることがわかる。また、男女の性別については申込時の記入項目としておらず受講生の正確な男女比は不明である。しかし、開校式の出席者の様子から女子の参加者が全体の大体半分以上であると思われる。

2019 年度は、テーマ 1「現代日本の社会文化を通して考えるグローバル人材のための 21 世紀型スキル」、テーマ 2「Society 5.0 と SDGs：藻類を利用したバイオエネルギープロジェクトを例に」、テーマ 3「SDGs と人々の健康：薬用植物の役割」の 3 つのテーマを設け、英語での対面授業を実施した。2019 年は新型コロナウイルス感染症が拡大する前年であったため、夏休みを中心に対面での授業を行い、大学生や留学生との交流も行った。プレゼンテーションによる発表会を翌年の 3 月に予定していたが、新型コロナウイルス感染症の拡大が始まり、成果発表会は中止せざるを得なかった。受講生は 3 テーマ合わせて 33 人で、高校 1 年生が 24.2%、2 年生が 66.7%、不明が 9.1%であり、受講生の修了率は 100%であった。

2020 年度は新型コロナウイルスのため、大学でも対面による講義自体が実施されていなかった。そのような中で、オンラインを利用した授業を実施することで取り組みの継続を図った。テーマも 2 つに絞り、英語を使用して実施したテーマ 1「Global Perspectives on “Society 5.0”」と数学を題材にしたテーマ 2「論理的思考を鍛えよう」を実施した。

2020 年度はコロナ禍で課外活動が制限されている中、テーマ 1 の応募人数が 58 人であった。できるだけ多くの受講生を受け入れようと考えたが、担当教員の負担を考慮し、志望理由等から 20 人を選抜した。受講生は 2 テーマ合わせて 34 人で、高校 1 年生が 23.5%、2 年生が 67.7%、不明が 8.8%であり、受講生の修了率は 92%であった。

2021 年度も同様にコロナ禍での課外活動が制限されている中での実施であった。前年度の実施状況から 2020 年度の人数より多くの受講生を受け入れることが可能であると担当教員が判断したため、応募があった 46 人全員を受け入れた。これ以降の年度でも受講希望者は全員受け入れている。

2021 年度、2022 年度も同様のテーマで実施したが、新型コロナによる高校での対面活動の中止が影響しているのか 2021 年度の受講生は 60 人を超えていた。受講生は 2 テーマ合わせて 64 人で、高校 1 年生が 29.7%、2 年生が 70.3%、不明が 0%であり、受講生の修了率は 78%であった。

2022 年度から対面での授業もできるようになり、開校式やプログラムや最後のプレゼンテーション等を対面で行った。テーマは先に示した 2 つであった。開校式では対面で肥後時修館の趣旨やテーマ別の受講方法などを説明し、その後の受講がスムーズに行えるようにした。2023 年度も同様に実施したが、テーマ 2 の内容を「大学数学へのいざない」として変更した。両年度とも受講生の学年占有率は表 4 の通りで、修了率は表 3 に示している。

5 年間で全受講生に対して集計した学年占有率は、表 4 の通りで、高校 1 年生が 26.9%、2 年生が 69.8%、不明が 3.3%であり、修了率は表 3 に示しているように 77%であった。

2.4 アンケート結果

すべての受講生に対して、受講生の学習に対する意識変化や授業内容の改善等のためにアンケートを実施した。年によりテーマ数や質問事項が異なったりしたが、英語を主に使用したテーマにおいて回答を集計した。質問項目は以下の通りで、質問項目は 2019 年度の対面授業への感想以外は毎年同じ質問である。

1. 肥後時修館の実施期間はどうかでしたか？
2. 受講生募集の申込書類作成について量は適当でしたか？
3. Moodle の利用について学習の効果がありましたか？
4. 肥後時修館で学んだことで、普段の学習に良い変化がありましたか？
5. 高校と大学の学びの違いを感じることはできましたか？
6. 授業内容は興味を持てるものでしたか？
7. 学校の授業の負担になりましたか？
8. 先生の指導は適切でしたか？
9. グローバルな視野で様々な事象を考える意識がついたと思いますか？
10. 次に開講してほしいテーマがあれば教えてください。（自由記述）
11. 最終の発表用ポスターはだれと作りましたか？
12. 複数で作った場合、作るときの話し合いは上手くいきましたか？
13. 12.で 4. 5. と答えた人は、理由を教えてください。（注：4. あまり上手くいかなかった、5. 上手くいかなかった）
14. グループでの話し合いは主にどのような方法で行いましたか？

15. 肥後時修館であなたが一番学んだことは何ですか？（自由記述）
16. 肥後時修館全般について意見や感想があればお願いします。（自由記述）

回答の選択肢は 14.を除いて 5 個である。コロナ禍前の初年度（2019 年度）は全テーマで主に英語を使用した対面授業を実施した。このため 2019 年度のアンケートでは「対面授業の効果の有無」を質問したが、2020 年度以降は、オンラインによる授業が主となったため、対面授業への感想は質問項目から外した。

2019 年度から 2023 年度に英語による授業を受けた受講生 136 人の中で回答を返した 60 人の結果を以下に示す。全体のアンケート回収率は、44%である。特に、2019 年度は 3 テーマの受講生 33 人が回収率の母数に含まれており、2020 年度以降の 1 テーマに対するものとは実施した状況が少し異なることに注意する¹⁾。結果は割合（%）で表している。

表 5 修了後のアンケート回答結果の抜粋（%）

3. Moodle の利用について学習の効果がありましたか。				
1. あった	2. 少しあった	3. 普通	4. あまりなかった	5. なかった
40.0	20.0	20.0	16.7	3.3
4. 肥後時修館で学んだことで、普段の学習に良い変化がありましたか。				
1. あった	2. 少しあった	3. 普通	4. あまりなかった	5. なかった
50.0	28.3	11.7	5.0	5.0
5. 高校と大学の学びの違いを感じることができましたか。				
1. できた	2. 少しできた	3. 普通	4. あまりなかった	5. なかった
76.7	16.7	1.7	1.7	3.2
8. 先生の指導は適切でしたか。				
1. 適切だった	2. 大体適切だった	3. 普通	4. 不適切なところがあった	5. 不適切だった
70.0	21.7	6.7	0.0	1.6
9. グローバルな視野で様々な事象を考える意識がついたと思いますか。				
1. とても思う	2. 思う	3. 普通	4. あまり思わない	5. 思わない
61.7	30.0	3.3	3.3	1.7

「4. 肥後時修館で学んだことで、普段の学習に良い変化がありましたか。」、「5. 高校と大学の学びの違いを感じることができましたか。」は特に注視していた質問であり、普段の学習に回答者の 78.3%が、

変化を感じており、高校と大学の学びの違いを実感した回答者が 93.4%いた。その他、「14. グループでの話し合いは主にどのような方法で行いましたか？（複数回答可）」との問いに対しては、1. SNS (70.3%)、2. E-mail (7.8%)、3. 電話 (0.0%)、4. 直接会って話した (11.0%)、5. Moodle (1.6%)、6. その他 (9.4%) の回答があった。「SNS」と答えた者の使用アプリは、LINE、Google Chat (旧ハングアウト)、Instagram であったが、ほとんどが LINE を使用していた。しかし、2023 年度は全員が Instagram を使用していた。「その他」は無回答だったため不明である。

自由記述では「多角的な視点で物事を見て、自分の意見をしっかり持つことの重要性」を実感したとの記述が何件もあり、「他の高校の生徒との交流を通じて、一つの事柄に関して議論や意見交換ができた。」との意見もあった。

2019 年度は 3 テーマの受講生 33 人の内 18 人から回答が得られた（回収率 54.5%）。コロナ禍前で、対面により授業が主だったため「夏休み・冬休みのスクーリングは自らの学びに対して効果がありましたか？」との質問を入れていた。回答は「（効果が）あった」は 50%（9 人）、「少しあった」44%（8 人）、「普通」6%（1 人）、「あまりなかった」、「なかった」、「その他」はそれぞれ 0%であった。対面での授業は、効果的であることが傾向として見られるが、次年度以降は新型コロナウイルス感染症の流行のためオンラインでの授業が主となった。各年度別の回答でも、表 5 に示した回答割合と同じ様な傾向を示し、表 5 にない残りの質問でも全体の傾向と大体同じ傾向が見られた。2020 年度は受講生 20 人の内 9 人（回収率 45.0%）、2021 年度は受講生 46 人の内 13 人（回収率 28.3%）、2022 年度は受講生 10 人の内 8 人（回収率 80.0%）、2023 年度は受講生 27 人の内 12 人（回収率 44.4%）から回答が得られた。

2020 年度から開講した数学に関するテーマについて、2020 年、2021 年は担当教員が作成した全て記述式のアンケートで、2020 年は 11 人、2021 年は 5 人から回答があった。質問は、授業内容に対する感想が主であった。2022 年度以降は英語使用のテーマと同じような質問で、「グローバルな視野で様々な事象を考える意識がついたと思いますか？」の質問を「論理的に考える思考が鍛えられたと思いますか？」に変更し、2022 年は 7 人、2023 年は 1 人から回答があった。回答数が少ないが、集計すると英語での授業と同じような回答の傾向が見られた。

2.5 新型コロナウイルス感染症拡大に伴う対策

当初の授業計画は、7～8 回の授業を対面で実施し、来学が難しい時期は、オンラインによる教育を行い、加えて留学生や大学生との交流や発表会を入れる予定であった。初めて実施した 2019 年度は、夏休み期間中に授業を開始し、3 日間対面で集中して授業を行い、秋の時期は Moodle を使った授業を行った。年が明け 2020 年 3 月に最終の成果発表会を行う予定であったが、新型コロナウイルス感染症の流行が始まり、発表会を断念し、それまでの授業理解度や授業に対する姿勢、発表会用に作成した資料により修了者を決定した。

2020 年度は大学でも対面の授業は行われておらず、まずは開校の可否から検討した。幸い Moodle による授業に対して、2019 年度にネットワーク環境が整っていないため受講できない等の問い合わせはなく、急速に大学、高校でオンラインを使った授業環境が整ってきていた状況でもあり、対面での授業ができるまでは、オンラインによる授業を中心に実施するように切り替えた。しかし、実施の際にネットワークの環境が本当に整っているか、また、参加してくれる受講生の数にも不安があったため、テーマを 2 つとし、開校準備の遅れもあり、秋頃から実施することにした。

2022 年頃から感染対策を取った中で対面での授業が実施できるようになった。しかし、熊本県外の高校から参加の要望があり、受講生の募集を九州内に広げることにした。そのため、授業はオンラインで行うことを基本とし、3 回ほどのスクーリングを実施する計画とした。

2.6 受講生の追跡調査

肥後時修館の受講生の内、本学に入学した者について調査した。受講対象が高校 1, 2 年生であるため、2023 年 3 月までに卒業をした受講生が対象になり、本学で入学等が確認できる者のみの結果である。

本学を志願した受講生は、2023 年 3 月までに高校を卒業した者 (147 人) の内 32.7% (48 人) であった。また、入学者は、高校を卒業した受講生のうち 23.1% (34 人) であった。図 1 は、卒業生がある高校ごとの受講生数と志願者数の散布図であり、N=30 校の高校がプロットされている。右上の受講生数 26 人、志願者数 11 人の高校は、2019 年度の試行時 7 校に含まれていた高校で 2019 年度に積極的に生徒に応募を勧めたこともあり 19 人も受講があった。このため、特別な事情があり外れ値として扱うのが妥当と考えた。サンプル数としては少ないが 29 校での相関係数を計算すると $R=0.65$ となった。さらに、母相関

係数の信頼区間を計算すると信頼度 95% で 0.37～0.82 となり、この 2 つの変数は相関を持ちそうであることがわかった。同様にして、入学者数を評価すると $N=29$ 校で相関係数 $R=0.57$ 、信頼区間は 0.26～0.78 であった。

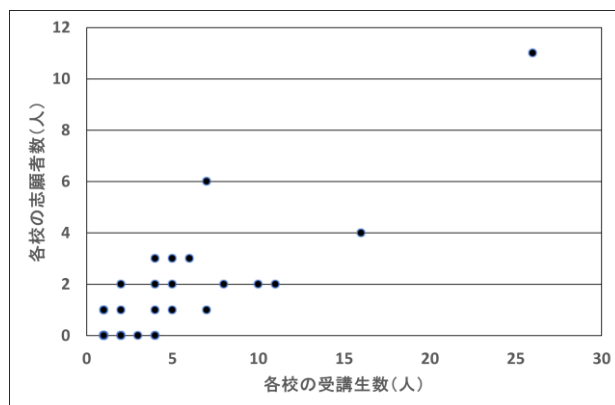


図1 各高校の受講生数と志願者数の散布図 (N=30)

当初は受講生を総合型選抜により GLC へ誘導しようと考えていたが目論見がはずれ、これまでのところ入試区分ごとの入学者数の割合は総合型選抜、学校推薦型選抜、一般選抜で大体同じである。すなわち、入試区分ごとの入学者の割合に際立った偏りはない。しかし、入試区分ごとの出願の延べ数は、学校推薦型選抜の出願数に対して一般選抜が約 2.1 倍、総合型選抜が約 1.6 倍の数がある。これは、総合型選抜により GLC に入学してグローバル教育と専門教育を学修したいと考えた受講生が、学校推薦型選抜を志願するより多かったのではないかと推測し、入学には至らないが GLC への志願者増に少なからず貢献したのではないかと考える。

初年度の GLC 生の教育に携わるのが、肥後時修館の英語テーマの教員である。担当教員に肥後時修館受講生の修学状況を尋ねたが、「学修状況は良好で意欲の高い学生が多いと感じる。」との感想を得ている。

表 6 全入学者の GPA 分布

GPA	割合(%)
3.0 以上	20.8
2.5～3.0	29.2
2.0～2.5	25.0
2.0 以下	25.0

また、1 年次を除いた全入学者の GPA について、表 6 にまとめている。3.0 以上が 20.8%，2.5～3.0 の間の者が 29.2%，2.0～2.5 の間の者が 25.0%，2.0 以下が 25.0%であった。母数が少なく傾向は一概に言えないが、GPA に関して本学の一般学生のものとは顕著な違いは見られない。

3 課題と今後の展開

3.1 課題

新型コロナウイルス感染症拡大の影響も収まり、ここ数年は通常の授業ができるようになった。今後は、テーマ数を増やすことが課題の一つと考える。開始した年は 3 テーマで行ってきたが、現在は 2 テーマであり、受講生の選択肢を多くするため新しいテーマの必要性を感じている。また、受講生に関して、受講期間中に部活動等の学校活動により参加が難しくなったり、理由がわからないまま途中で受講を止める受講生がいたりしており、受講生への細かな配慮が必要と考えている。さらに、開校についてもその時期や年間の回数等もう一度考える必要がある。先に述べた修了率の低下傾向も懸念される点であるが、今のところ原因を突き止められず対策できていない。そして、修了後の受講生へのアンケート調査の回答率ももう少し上げていきたいと考えており、現在は、3 月に修了し、年度が明けてアンケートの回答を求めているので、修了後できるだけ早い段階でアンケートを取れる体制にしたい。受講生の追跡調査について、GPA 以外にも入学者に個別面接を行い修了後のアンケート結果も参考にしながら、目的がどの程度達成されているか調査し、肥後時修館の学士教育への実際の効果や感想を集めることも必要と考えている。

熊本県外の高校からの要請もあり、2022 年度から九州全域から受講生を募集するようにしたが、これまで熊本県外からの受講は 1 人だけという状況である。熊本県外への広報を工夫する必要があると考え、現在検討中である。

現在は大学教育統括管理運営機構に所属する教員が授業を担当しているが、本学が 2022 年度に採択された文部科学省の「地域活性化人材育成事業」（通称 SPARC 事業）や熊本創生推進機構の高大連携事業との連携を強化したいと考えており、関連する他の部局へ取り組みを広げることも今後の課題である。

3.2 今後の展開

前述した SPARC 事業や熊本創生推進機構の高大連携事業との連携強化は、今後この事業を展開する上で

重要と考えている。また、肥後時修館を高校生に対する本学の「先取り履修」の場として提供することも受講生のメリットとして検討したい。本学では GLC 入試で合格した生徒に入学前の教育を行っているが、科目等履修生として、入学後に認められる教養の科目を 1 単位、法学部に所属予定の生徒ならば、さらに専門科目の単位も 1 単位先取りで取ることができる。この様に入学が確定している者に対しては、先取り履修の制度を整えていたが、現段階では入学が確約されていない者に対する先取り履修の制度は整備されておらず、今後単位化を目指すならば学内の議論を経て同意を取り付ける必要がある。

図 1 の考察により各高校に十分な広報をし、意欲的に肥後時修館を受講してくれる高校生が多くなれば、本学の教育内容を知って志願してくれる高校生が増える可能性があることがわかった。今後もデータを蓄積し、分析することで、高大接続活動に役立てて行きたいと考える。

注

1) 英語を使用した授業について、2019 年度のみ自然科学的な内容の 2 テーマと社会科学的内容の 1 テーマ合わせて 3 テーマを対面で実施した。2020 年度以降の英語の授業は、オンライン主体の社会科学的内容の 1 テーマであり、2019 年度と実施状況が少し異なっている。表 5 は、以上の状況で英語の授業を受けた全ての受講生をアンケートの対象とし、回答をまとめた結果である。

謝辞

本研究にあたり熊本大学 高大連携推進室ならびに大学教育統括管理運営機構 附属多言語文化総合教育センター、附属数理科学総合教育センター、国際部 国際教育課には多大なご協力をいただき感謝いたします。

参考文献

- 平英雄・今村清寿・田中知史・市川聡夫・飯田裕 (2023). 「熊本県における高大連携活動の新展開 ―熊本サイエンスコンソーシアムの設立―」『令和5年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会（第18回）研究発表予稿集』オープンセッション用, 174–178.
- 熊本大学 (2023). 「熊本大学グローバル化戦略 (KU Globalization Strategy as of 2023)」
<https://www.kumamoto-u.ac.jp/kokusaikouryuu/global-torikumi/prqx47> (2024年11月13日).
- 平英雄・宮崎功・川上修治・Ngo Thi Bich Thuy (2019年5月). 「熊本大学グローバルリーダーコース (AO) 入試 ―3期生

をむかえての入試から教育までの実践報告」 『令和元年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会（第14回）研究発表予稿集』 **I**, 75－80.

熊本大学（2024）『令和7年度(2025年度) 総合型選抜 学生募集要項（グローバルリーダーコース入試）』 令和6年7月19日.

前中ひろみ（2024）「グローバル・リーダー人材育成をめざして(国際教養大学の取り組み)」 『リメディアル教育研究』 **9**, 51－56.

秋田県地方独立行政法人評価委員会（2024）「令和5年度公立大学法人国際教養大学の業務の実績に関する評価結果」
https://www.pref.akita.lg.jp/uploads/public/archive_0000007943_00/★【確定版】_教養大学年度評価調書.pdf (2024年11月13日).

大阪府（2023）「令和5年度 大阪府グローバルリーダーズハイスクール評価審議会」
<https://www.pref.osaka.lg.jp/o180040/kotogakko/tokusyoku/r5-gl-hyouka.html> (2024年11月13日).